

『ヨハネの手紙1』を日本語訳でいかに読むか

佐々木 隆*

How to read the Epistle of John 1 by Japanese translation

Takashi SASAKI*

Key words : レトリック rhetoric

対置 contraposition

交わる fellowship

とどまる remain

はじめに

『ヨハネの手紙1』は「神は愛である」と端的に示された聖書の中で唯一の手紙である。その話の展開については論理的ではなく、らせん構造であると言われる。それは話に一貫性が見えず、また同じ言葉を繰り返すだけで新たな説明も展開もないと思われるからである。ブルトマンは原文がギリシア語のレトリックを指摘し、津村春英氏は精緻で優れた『ヨハネの手紙』の研究』を書かれている。本研究もそれらに依拠しているが内容についての責任はすべて筆者にある。

一般的な読者が全く異なる言語である日本語訳で読む時にはレトリックは見えなくなると思われる。だが、よく読むと同じ言葉の繰り返しがあることに気付くことができる。そこで、新共同訳の「ヨハネの手紙1」を分節化し、同じ言葉を並べ対比することを試みた。翻訳は何よりも意味を伝えることに主眼が置かれていたにもかかわらず、言葉の対置などのレトリックの一部が見えてきたのである。それらは部分的にバラバラに現れると予想したが、ほぼ最初から最後まで全体を一貫して続くことが明らかになった。それを示すことが本論文の目的である。

古代において言葉は文字に書かれたものよりも音声で聞くことの方が重んじられた。この手紙も文章として一人の人が黙読するのではなく、声に出して唱えられ大勢に聞かれ、また大勢も一緒に唱えたもののように思われる。だから耳に快く響く反復のリズムは説得と共感の方法でもあったのである。しかし、文字で表記すると、紙面の幅などで、対照することが難しいところがある。本論文の紙面でも、言葉の対を示すためにかなり無理がでている。ゴシックや太字にした言葉は同じ言葉の対や対立する言葉の対になっているが、原文ではもっと対が明らかに見えてくるものである。このように表記し視覚化すると、この手紙の著者が強調したことが感じられるであろう。これは知に働きかけて論理的に説得するよりも、情に訴えて信仰の仲間であることをレトリックによって情緒的に確認し、今ある共同体の結束をかため組織を守る目的の文章であることが明らかになる。

訳文の視覚的分節化の試み

*東北女子大学

1..1 初めから¹ あったもの、
わたしたちが 聞いたもの、

目で見たもの、

よく見て手で触れたもの² を 伝えます。すなわち、

命の言について。――

1..2 この命は 現れました。御父と共にあったが、

わたしたちに 現れた

この永遠の命³を、

わたしたちは見て、

あなたがたに証しし、 伝えるのです。――

1..3 わたしたちが見、また聞いたことを、

あなたがたにも 伝える⁴のは、

あなたがたも

わたしたちとの 交わりを持つ ようになるためです。

わたしたちの 交わりは、御父と御子イエス・

キリストとの 交わり⁵です。

1..4 わたしたちがこれらのことを 書く⁶のは、

わたしたちの 喜びが満ちあふれる よつになるためです⁷。

1..5 わたしたちがイエスから既に 聞いていて、

あなたがたに 伝える 知らせとは、

神は 光⁸であり、

神には闇⁹が全くないということです。

1..6 わたしたちが、

神との交わりを持つていと言いながら¹⁰、

闇の中を 歩むなら、

それは うそをついているのであり、

真理を行ってはいません。

1..7 しかし、神が 光の中に おられるように、

わたしたちが 光の中を 歩むなら¹¹、

互いに 交わりを持ち¹²、御子イエスの血によって
あらゆる罪から 清められます。

1..8 自分に罪がないと 言うなら、 自らを欺いており、

真理は わたしたちの 内にありません。

1..9 自分の罪を公に 言い表す¹³なら、

神は真実で 正しい方¹⁴ですから、罪を赦し¹⁵、

あらゆる不義から わたしたちを 清め¹⁶てくださいます。1..10

罪を犯したことがないと 言うなら、それは神を偽り者¹⁷とすること

であり、

神の言葉は わたしたちの 内にありません¹⁸。第2章

2..1 わたしの子たちよ、これらのことを 書くのは、

あなたがたが罪を犯さないようになる ためです。

たとえ罪を犯しても、

御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。

2..2 この方こそ、わたしたちの罪、

いや、わたしたちの罪 ばかりでなく、

全世界の罪 を償う いけにえ です。

2..3 わたしたちは、神の掟を守るなら、

それによって、神を知っていることが分かります。

2..4 「神を知っている」と言いながら¹⁹、

神の掟を守らない者は、偽り者で、

その人の中には 真理²⁰はありません。

2..5 しかし、神の言葉を守るなら、

まことにその人の内には神の愛が実現しています²¹。これによって、

わたしたちが神の内に いることが分かります²²。

2..6 神の内にも²³ いると言う人は、

イエスが 歩まれたように

自らも 歩まなければなりません²⁴。2..7 愛する者たち、

わたしが あなたがたに 書いているのは、

新しい掟ではなく、あなたがたが 初めから受けていた

古い掟です²⁵。この

古い掟とは、あなたがたが 既に聞いたことのある言葉です。

2・8 しかし、わたしは

新しい掟²⁶として書いています。そのことは、

イエスにとつても

あなたがたにとつても 真実です。 闇が去って、

既にまこと²⁷の 光が輝いているからです。

2・9 「光の中にいる」と言いながら、

兄弟を憎む者は、 今もなお闇の中に²⁸います。 2・10

兄弟を愛する人は²⁹、いつも光の中に おり³⁰、

その人にはつまずきがありません。 2・11 しかし、

兄弟を憎む者は

闇の中におり、
闇の中を歩み、

自分がどこへ行くかを知りません。

闇がこの人の目を見えなくしたからです。

2・12 子どもたちよ、 わたしがあなたがたに書いているのは、³¹

イエスの名によって あなたがたの罪が赦されている³²からである。

2・13 子どもたちよ、 わたしがあなたがたに書いているのは、

あなたがたが、初めから存在なさる方を 知っている からである³³。

若者たちよ、 わたしがあなたがたに書いているのは、

あなたがたが 悪い者に打ち勝った からである。

2・14 子どもたちよ³⁴、 わたしがあなたがたに書いているのは、

あなたがたが 御父を 知っている からである。

父たちよ、 わたしがあなたがたに書いているのは、

あなたがたが、初めから存在なさる方を 知っている からである。

若者たちよ、 わたしがあなたがたに書いているのは、

あなたがたが強く、神の言葉があなたがたの内に いつもあり³⁵、

あなたがたが 悪い者に打ち勝った からである。

2・15 世も世にあるものも、³⁶

愛してはいけません。

世を愛する人がいれば、

御父への愛は その人の 内にありません。 2・16 なぜなら、

すべて世にあるもの、肉の欲、

目の欲、生活のおごりは、

御父から出ないで、

世から出るからです。

2・17 世も世にある欲も 過ぎ去って行きます³⁷。しかし、

神の御心を行う人は 永遠に生き続けます³⁸。

2・18 子どもたちよ、 終わりの時が来ています。

反キリストが来ると、あなたがたが かねて聞いていたとおり、

今や多くの

反キリストが現れています。

これによって、終わりの時が来ていると分かります³⁹。

2・19 彼ら⁴⁰はわたしたちから 去って行きましたが、もともと

仲間ではなかったのです。

仲間なら、わたしたちのもとに とどまっていたでしょう⁴¹。

仲間ではないことが明らかになりました。 2・20 しかし、

あなたがたは聖なる方⁴²から油を注がれているので皆⁴³、

真理を知っています。 2・21

あなたがたが真理を知らないからではなく、

あなたがたが真理を知り、また、すべて偽りは真理から生じない

ことを知っているからです。

2・22 偽り者とは、イエスが メシアであることを

否定する者⁴⁴でなくて、だれでありましょう。

御父と御子を 認めない者、これこそ反キリストです。 2・23

御子を認めない者はだれも、御父に結ばれていません。御子を公に言い表す者は、御父にも結ばれていません。2:24 初めから聞いていたことを、心にとどめなさい。

初めから聞いていたことが、あなたがたの内にもあるならば、あなたがたも御子の内に、また御父の内にもいるでしょう。

2:25 これこそ、御子がわたしたちに約束された約束、永遠の命です。

2:26 以上、あなたがたを惑わせようとしている者たちについて書いてきました。2:27 しかし、

いつも あなたがたの内には、

御子から注がれた油があります⁴⁷から、

だれからも教えを受ける必要がありません。

この油が万事について教えます。それは真実であって、

偽りではありません。

だから、教えられたとおり、

とどまりなさい。2:28 さて、子たちよ、

御子の内に いつも とどまりなさい。そうすれば、

御子の現れる とき、 確信⁴⁸を持つことができ、

御子が来られるとき、御前で恥じ入るようなことはありません。

2:29 あなたがたは、

御子が正しい方だと

義を行う⁴⁹者も皆、神から生まれ⁵⁰ていることが分かるはずです。

第3章3:1 御父がどれほど

わたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、

わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです。

世が わたしたちを 知らないのは、

御父を 知らなかつたからです。3:2 愛する者たち、

わたしたちは、今既に神の子ですが、

自分がどのような⁵¹かは、まだ示されていません。しかし、

御子が現れるとき、

御子に似た者となるということを知つて⁵²います。なぜなら、そのとき

御子をありのままに

御子にこの望みをかけている人は皆、

御子が 清いように⁵³、

自分を 清めます。

3:4 罪を犯す者は皆、法にも背くのです。

罪とは、法に 背くことです。

3:5 あなたがたも 知つて⁵⁴いるように、

御子は 罪を除くために 現れました。

御子には罪がありません。3:6

御子の内にもいつもいる人は皆、

罪を犯しません。

罪を犯す者は皆、御子を見たこともなく、知つてもいません。

3:7 子たちよ、だれにも惑わされないようにしなさい。

義を行う者は、御子と同じように、正しい人です。

3:8 罪を犯す者は 悪魔に属します⁵⁵。

悪魔は初めから

罪を犯しているからです。

悪魔⁵⁶の働きを滅ぼすためにこそ、

神の子⁵⁷が 現れたのです。

3:9 神から生まれた⁵⁸人は皆、罪を犯しません。

神の種⁵⁹が この人の内にもいつも ある⁶⁰からです。

3:10 神の子たちと 罪を犯すことができません。

悪魔の子たちの区別は明らかです。

正しい生活⁶¹をしない者は 皆、神に属していません。

自分の兄弟を愛さない者⁶²も 同様です。

3:11 なぜなら、互いに愛し合うこと、

これがあなたがたの初めから聞いている教えだからです。
3…12 カイン⁶³のようになってはなりません。
彼は悪い者に属して、兄弟を殺しました。

なぜ 殺したのか。
自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです⁶⁴。

3…13 だから 兄弟たち、世が

あなたがたを憎んでも、驚くことはありません。3…14

わたしたちは、自分が死から命へと 移ったことを知っています。

兄弟を愛しているからです⁶⁵。

愛することのない者は、死にとどまっています⁶⁶。3…15

兄弟を憎む者は皆、人殺しです。あなたがたの知っているとおり、

すべて人殺しには永遠の命が とどまっています。3…16

イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのこ

とによって、わたしたちは愛を 知りました。だから、

わたしたちも兄弟のために 命を捨てるべきです⁶⁷。3…17 世

の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者が

あれば⁶⁸、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう。

3…18 子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛

し合おう。3…19 これによって

わたしたちは自分が真理に属していることを 知り、

神の御前で 安心できます。3…20 心に責められることがあろうと

も。
神は、わたしたちの心よりも大きく、すべてをご存じ⁶⁹だからです。

3…21 愛する者たち、わたしたちは心に責められることがなければ⁷⁰、

神の御前で 確信⁷¹を持つことができます、

3…22 神に願うことは何でもかなえられます。

わたしたちが神の掟を守り、御心に適うことを行っているからです。

3…23 その掟とは、神の子イエス・キリストの名を信じ、

この方がわたしたちに命じられたように、互いに愛し合うこと

3…24 神の掟を守る人は、

神の 内にいつも とどまり、

神もその人の 内に とどまってくださいます。

神がわたしたちの内に とどまってくださいますことは、

神が与えてくださった 霊 によって分かります。第4章

4…1 愛する者たち、どの霊も信じるのではなく、

神から出た 霊かどうかを確かめなさい。

偽預言者が大勢世に出て来ているからです。

4…2 イエス・キリストが 肉⁷²となつて来られたということ

公に言い表す 霊は、すべて

神から出たものです。 このことによって、

あなたがたは 神の霊が 分かります。4…3 イエス

のことを

公に言い表さない 霊は すべて、

神から出ていません。これは、反キリストの霊です。

かねて あなたがたは、その霊がやつて来ると聞いていましたが、

今や既に 世にきています。4…4 子たちよ、

あなたがたは 神に属しており、

偽預言者たちに打ち勝ち⁷³しました。なぜなら、

あなたがたの内におられる方は、世にいる者よりも強いからです。

4…5 偽預言者たちは世に属しており、そのため、世のことを話し、

世は彼らに 耳を傾けず。

4…6 わたしたちは 神に属する者です。神を知る人は、

わたしたちに 耳を傾けませんが、

神に属していない者は、

わたしたちに 耳を傾けません。これによって、

真理の霊と人を惑わす霊⁷⁴とを見分けることができます。4…7

愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。

愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。4…8愛することのない者は神を知りません。

神は愛だからです。⁷⁵

4…9 神は、独り子を世に お遣わしになりました。

その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。

ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。4…10

わたしたちが神を愛したのではなく、

神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償う いけにえとして、

御子を お遣わしになりました。

ここに 愛があります。4…11 愛する者たち、

神がこのようにわたしたちを 愛されたのですから、

わたしたちも 互いに 愛し合うべきです。

4…12 いまだかつて神を見た者はいません。

わたしたちが 互いに 愛し合うならば、

神は わたしたちの 内に とどまってください、

神の愛がわたしたちの 内で 全うされている⁷⁶のです。4…13

神はわたしたちに、御自分の霊⁷⁷を分け与えてくださいました。

このことから、わたしたちが神の 内にとどまり、

神もわたしたちの 内にとどまってくださいることが分

かります。4…14 わたしたちはまた、御父が御子を世の救い主とし

て遣わされたことを見、またそのことを 証ししています。

4…15 イエスが神の子であることを 公に言い表す人はだれでも、

神がその人の 内にとどまってください、

その人も神の 内にとどまります。4…16 わたした

ちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また 信じています。

神は愛です。 愛にとどまる人は、

神の 内にとどまり、

神もその人の 内にとどまってくださいます。4…17

こうして、愛がわたしたちの内に 全うされている⁷⁸ので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。

4…18 愛には 恐れがない。

完全な愛は 恐れを締め出します。

なぜなら、 恐れは罰を伴い、

恐れる者には愛が 全うされていないからです

4…19 わたしたちが愛するのは、

神がまずわたしたちを愛してくださったからです。

4…20 「神を 愛している」と言いながら

兄弟を 憎む者がいれば、それは偽り者です。

目に見える 兄弟を 愛さない者は、

目に見えない 神を 愛することができません。

4…21 神を 愛する人は、

兄弟をも 愛すべきです。

これが、神から受けた掟です。 第5章5…1

イエスがメシアであると信じる人は皆、神から生まれた者です。そして

生んでくださった方を愛する人は 皆、

その方から 生まれた者をも愛します。

5…2 このことから明らかなように、わたしたちが

神を愛し、 その 掟を守る ときはいつも、

神の子供たちを 愛します。5…3

神を愛するとは、神の 掟を守る ことです。

神の掟は難しいものではありません。5…4 神から生まれた人は 皆、

世に打ち勝つからです。

世に打ち勝つ勝利、それはわたしたちの信仰です。5…5 だれが

世に打ち勝つか。イエスが神の子であると信じる者ではありませんか。

5…6 この方は、水と血を通して来られた方、イエス・キリストです。

水だけではなく 水と血とによって来られたのです。そして、

「**霊**」はこのことを 証しする⁷⁹方です。
 「**霊**」は真理だからです。5・7 証しするのは三者⁸⁰で、5・8
 「**霊**」と水と血です。 この 三者は一致しています。

5・9 わたしたちが人の 神の 証しを受け入れるのであれば、
 神が御子についてなさった 神の 証しは更にまさっています。

神の子を信じる人は、 証し、
 これが 神の 証しだからです。5・10

自分の内にこの 証しがあり、

神を 信じない人は、
 神が御子についてなさった 証しを信じていないため、
 神を偽り者にしてしまっています。

5・11 その 証しとは、

神が 永遠の命をわたしたちに与えられたこと、

そして、この命が

御子の 内にあるということです。5・12

御子と 結ばれている人には この命があり、

神の子と 結ばれていない人には この命がありません。5・13

神の子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書き送るのは、

永遠の命を得ていることを悟らせたいからです。5・14

何事でも神の御心に適うことを わたしたちが

願うなら、神は 聞き入れてくださる。

これが神に対するわたしたちの確信です。5・15 わたしたちは、

願い事は何でも 聞き入れてくださるということが 分かるなら、

神に願ったことは 既にかなえられていることも 分かります。

5・16

死に至らない 罪を犯している⁸¹ 兄弟を見たら、その人のために

神に願いなさい。そうすれば、神はその人に命をお与えになります。

これは、

死に至らない 罪を犯している 人々の場合です。

死に至る 罪があります。これについては、

神に願うようには言いません。5・17

不義はすべて 罪です。しかし、

死に至らない 罪もあります。5・18

わたしたちは 知っています。

すべて 神から 生まれた者は罪を犯しません。

神からお生まれになった方が、その人を守ってください、

悪い者は手を触れることができません。5・19

わたしたちは 知っています。

わたしたちは 神に属する者 ですが、この世全体が

悪い者の支配下 にあるのです。5・20

わたしたちは 知っています。

神の子が来て、真実な方を知る力を与えてくださいました。

わたしたちは 真実な方の 内に、

その御子イエス・キリストの 内にいるのです。

この方こそ、**真実の神**⁸²、永遠の命です。

5・21 子たちよ、**偶像**を 避け⁸³なさい。

結論

出来る限り日本語で反復や対比が見えるようにしたが、原文にはない日本語訳の対句などを作ってしまった。例えば、動詞の格で複数形の「わたしたち」が示された代名詞がない場合など。しかし、それでも同じ言葉でありながら読み取れるものが今までとは違ってきたはずである。書かれてあるものの強調点が分かりやすくなったので、内容の理解も少しは深まるのではないかと思われる。筆者も、従来から、最後の5章21節の「子たちよ、偶像を避けなさい」という言葉に唐突さを感じていた。それが論理的な整合性ではなく、ここまで述べてきたことの意味に従って対を探すと、真実の神と偶像は対立する対となつ

ていることが分かった。「子たちよ」の呼びかけも、最後の部分まで形式的にはレトリックの構成の一貫性が保たれていることを示すものであるように思われる。

元になったテキストは『新共同訳新約聖書』である。章分けや節の番号はそのまま残した。なお、このような訳文の提示に到れたのは拙論『ヨハネの手紙Ⅰ』をどのように読むか』上智人間学紀要42の考察を経たことによるものである。

¹ヨハネの福音書の根源を意味する「はじめに」と少し異なる。しかし、同じような印象を与える歴史的な「はじめから」が8回も繰り返され、わたしたちの共同体コイノニアの正統性を示すように思われる。

²「もの」の反復によって、実体的な印象を与え現実性を示している。

³「永遠の命」は6回繰り返されるが、その意味は説明されていない。

⁴見た、聞いた、現れた、伝えるという言葉が現実性を示す。伝えるという言葉は4回使用される。

⁵交わりは一致とも訳され共同体の存在を示している。それがいわゆる父と子と聖霊の三位一体に後から重ねられて行ったと思われる。

⁶「書く・グラボ」という言葉が13回使われている。手紙の中であえて書いても書き遺さなければならぬという掟性を示している。この喜びの部分については書くという動詞が、私たちが書くという複数形になっているのは、あなたたちと私たちが形成している共同体全体にかかわるからではないか。

⁷二つの「ようになるためです」は交わりと喜びが一つのものであることを示している。知るといっただけではなく信じて交わり（友愛）を持つという実践がなければ喜びは得られないのである。

⁸これは神を象徴するものであって定義ではない、だから、光は神であるとは言えないが、後にある「神は愛である」と結びつけると、愛は光であることになる。また、光は理性のよう思われるが、愛であるような光でなければならぬことを示している。愛によってこの世の中が明るくなることになり、正しい道も歩めるようになる。悪は愛のないところに生ずる。

⁹ヨハネ福音書の冒頭1:5にある光と闇の対比を思わせる。
¹⁰言っていることと行っていることの違う者たちがいることを全体で4回繰り返して示している。「木はその実でわかる」マタイ12:33。真理を行うとは、偽りの世界に対して一隅を照らすような真理の光を差し込む意味ではないかと思われる。

¹¹光の中を歩むか闇の中を歩むか、正しく生きるか正しくない生き方を示るかが示され、信仰の私秘性ではなく公開性が示されている。
¹²父なる神と子なる神の交わり、あなたたちがわたしたちの交わり、神と人間の交わりの関係を並行させて示している。

¹³言うと言いはずは似ている。しかし、言いはずは信仰を公言する意味が強い。人間の罪と神の真実が対比されて、罪が人間の欺瞞（不正・不義）から生まれることを示している。「公に言いはず」と言う言葉は7回繰り返される。信仰と言うものが私的なものではなく公的なものであることを示している。

¹⁴デカイオスという言葉で義とも訳される。2:1でも使われ、章は分かれるが、対となつている。正しさにおいて父なる神とイエス・キリストの同一性が示されている。

¹⁵キリストの血によって、神によってと、許し方が少し異なるが三位一体でキリストと父なる神そして聖霊が一つならば矛盾はないと後の時代では理解したのではないか。

¹⁶あらゆる罪と不義からの清めで、罪は神に対するもので不義はほぼ同じですが共同体に対する違反のようなもののように思われる。

¹⁷「神は真実」と「神は偽り者」の対比が示され、神の正しさと真実が強調され、5:10でもう一度でてくる。

¹⁸真理はわたしたちの内にありません。「神の言葉はわたしたちのうちにありません」と、真理と神の言葉を言い換えて強調している。わたしたちと複数形で言うのは個人性ではなく共同体性の強調であろう。内にあるとは心臓が身体の中にあるようにあるのではなく、神の言葉に従って正しく生きるということである。

¹⁹掟を守ることを知ることを一致させ、知ることが観念的なことではなく、生きる現実とかわかることを示している。

²⁰「真理」と次の「まことに」は同じアレテイという言葉が使われているので、単なる誇張ではなく真実性を強調していることが分かる。

²¹人の内とは一人一人の個人の内面を指している。内面的な理解において神の内という言葉が続いている。単に儀礼的な一致ではないことを示している。そして掟と愛の関係が示される。愛という言葉がこの手紙には52回も出てくるが、すべてアガペーの変化形であつて、他の愛・エロスやフィリアのような言葉は使われていない。

²²「わたし」ではなく「わたしたちが神の内にいる」とは神の内を共同体の内に重ねられている。

²³「いつも」という言葉は単に反復性だけではなく恒常性を示す肯定的な言葉として使われ11回繰り返される。

²⁴人間であるイエスが生きよう人間である我々も人間として同じように、イエスと共に歩むように生きなければいけない。

²⁵古い掟と新しい掟は、共同体の中に異端が現れ、彼らが新しい掟を語つ

たのではないかと思われる。正統派としては初めからの掟に変更はなく、この掟は何時でも古びない新しいものであることを強調したものであろう。²⁶新しい、古い、古い、新しい、と新旧を交互に示して、それを超える永遠の真理性を示している。古いは古びて廢れる陳腐の意味ではなく根源的なものになり、新しいは新奇ではなく、古びない意味になる。御子イエスの存在と教えの新鮮さを暗示している。

²⁷ここでも真実と「まこと」は同じアレテーの形容詞であり単なる強調ではない。真実は光であり虚偽は闇であることになる。

²⁸憎しみが闇を作り出し、闇と憎しみが同じものであると示される。闇は明かりの欠如であるだけでなく、積極的な悪の行為をさしているように思われる。

²⁹兄弟は基本的には平等の存在を示す。ここでは肉親の兄弟よりも共同体のメンバーの意味であろう。「憎む」と「愛する」を対比して示している。内部で対立があったと思われる。

³⁰メネイ(留まっている)で、前の「いる・エイナイ」とは異なる。

³¹ここから書いている「で対にされた六つの言葉が示される。前の3回繰り返されるのは書くという言葉は現在形で、後の3回の繰り返しがアオリストで日本語では過去形になっている。「書いています」と「書いたぞ」と言うぐらいの違いだろうか。しかし、そのような文章の途中で書き手の自意識が現れるのは、子たち、若者たち、父たちという、前の兄弟に対して別個の相手を意識したためなのであろうか。これは論理的な展開ではない。

³²子たち(テクニア)の罪がイエス(彼・代名詞で示されている)の名において許されている言い方は、不義との関係で幼く無知の故に、過ちを犯し、許されたことのある者たちを指しているのではないか。無知と言うのは、次の父たちが「知っている」からである。

³³父については「初めからおられる方を知っている」と全く同じことが繰り返される。「初めからおられる方」とはイエス・キリストのことも御父であることも受け止められるが福音書によれば共にあったのでどちらにも受け取ることができる。子供たちバイディアは前にイエスの名と解されるのに御父を知っているとずれがあるように思われる。

³⁴子たちテクニア7回と子供たちバイディア2回と使い分けられている。テクニアは生まれ、バイディアは教えの意味が含まれる。

³⁵神の言葉、内、いつも、というよく使われる言葉が説明として付け加えられているが他の子ども、父たち、若者に対応していないが、次の「御父への愛はその人の内にありませぬ」の「内」と対応する。父と子の関係の中に「わたしたち」がいること、その関係性の中にとどまることが強調される。

³⁶「世」が「わたしたち」と「あなたがた」に対立するものとして示されるが、「子たちよ」から始まる前の文章との論理的なつながりや説明は示されていない。付け足しのような節である。アウグスティヌス『告白』十巻で、わ

たしたちの心の中にこのような欲望が内在し、夢の中に現われてくることを語っている。

³⁷「パラゴ」は消え去る意味で、次の残る(ネメイ)と対比される。

³⁸留まる(メネイ)という言葉が使われている。これは信仰を妨げる世俗化に対する警告であらう。しかし、前の「子たちよ」の呼びかけは、次の反キリストと終末へと直接結び付くように思われるが、「過ぎ去ってゆきませぬ」が「生き続けます・留まる(メネイ)」という言葉を介して、次の「去って行く・エクセルコマイ」と対応している。過ぎ去って終末が来るとすれば論理的につながりますが、終末が来ると動詞は現在形で示されている。

³⁹反キリストと終末という危機を強調している。「反キリスト」(単数)、「多くの反キリスト」(複数)、しかし、それがどのようなものか説明していない。⁴⁰「彼ら」は「わたしたち」「仲間・わたしたち」から出て行った人たちのだが「多くの反キリスト」を指しているように読める。共同体に内部分裂があったとみて良いだろう。

⁴¹前の「生き続ける」と同じメネイが使われている対の言葉である。

⁴²「聖なる方」という言い方はここにしかない。後に「御子から注がれた油」とあるので、イエス・キリストのことと思われるが、三位一体論からいえば御父の可能性もありうるであらう。

⁴³皆(パラス)と言う訳語が9回繰り返される。これは誇張された言葉だが、元が同じ言葉「すべて」(パラス)も9回繰り返されている。計18回使われている、全てか無かというような二元論的な思考をしているのは、終末論的な発想が元にあるからであらう。

⁴⁴文脈から、真理とはイエスがキリスト(メシア)であること、偽りとはイエスがメシアであることをイエス・キリストが父なる神の子であること否定することになる。5…1にもでてくるが、ヨハネ共同体の核になる信仰とその信仰を否定する者との対立が示されている。

⁴⁵結ばれるは「持つ・エコオ」という言葉が使われている。父を持つという言い方は家族の一員であることを暗示するよう思われる。

⁴⁶いつもある(メネト・命令・現在)、いつもいるでしょう(メネイテ・未来)、前述の留まる(メノ)と同じ言葉である。御父の内、御子の内、そして父と子の関係性の内に入ることは、その関係性の型どりである共同体の関係性の内にあることを意味している。

⁴⁷「いつも・あります」もメネイ(メノの現在形)である。油(クリスマ)は聖霊(真理の霊)のこととされる。言葉の繰り返しの文脈においては「いつも聞いていたこと」神の言葉や真理を油に譬えているとも考えられる。

⁴⁸確信(パッレーシオン)は内面だけではなく外面においても堂々としている態度で、裁きにかかわる言葉のようである。となりの文と対になって現れる時、来る時、恥と言うのは心の不安定な状態で堂々とは反対の身を小さくすることになるので確信と対比されるものと思われる。

⁴⁹正しい方(デイカイオス)、義を行う(デイカイオシュネーン)とは直

接的な関連性が分かる言葉なのだが日本語で「正しい」と「義」と訳し分けると言葉の意味の間に距離が出るように思われる。ほぼ同じ正と義の言葉が3・7と対応し、義と3・8の罪と対比される。

⁵⁰「神から生まれ」という表現が7回出てくる。信仰を持つ者には神が一つの起源であり、神が人間の根源であることを示している。それは御父と御子キリストの関係に準ずることも示しているようである。次に「神の子」という表現はこの部分に應ずるものと思われる。

⁵¹このようになる、御子に似たようになる。なぜ、そのようになるのかは書かれていない。そのように信じていることを示している。

⁵²「知らなかった」「知らなかった」と来て、「知っています」と受けている。これも共同体の信仰箇条であろう。

⁵³「御子が清いように」と「御子には罪がありません」は対である。

⁵⁴「知っている」を繰り返して、御子に習うことを勧めている。

⁵⁵「悪魔に属します」は「悪魔から由来します」所属だけではなく起源を示している。次の「初めから」と対応する。「属する」という訳語は前置詞エク（なになにから・由来する）で、9回も使われている。

⁵⁶「悪魔」の繰り返して、悪と正しいものとの峻別がある。神の子（テクナ・トウ・テウ）と悪魔の子（テクナ・トウ・ディアボルウ）と対比がなされている。

⁵⁷神の子はイエス・キリストを現わす。ここでは「テクナ」ではなく「フィオス・息子」が使われているので神の子よりも御子の方が訳として相応しいと思われる。

⁵⁸人と神の子の神からの起源の同一性ではなく共通性を示している。

⁵⁹神の種はここにしか出てこないが、種を蒔くことと油を注ぐことがイメージとしてつながるなら、我々に内在する助け手としての聖霊を象徴するように思われる。いわゆる良心として理解できる。

⁶⁰ここも「メネイ」が使われている。

⁶¹「正しい生活」はディカイオシユネの訳だが「正しいこと」と訳した方が、言葉として悪との対応が分かりやすい。

⁶²この兄弟は前に述べたように共同体の仲間のことだが、神に由来するものたちとすることが出来る。縦の関係を述べたことに対して横の関係をここで述べている。

⁶³旧約聖書の有名なアダムとイブの子であるカインとアベルの兄弟の物語であるが、一般には、神がカインの供え物を受け入れず、アベルのものを受け入れたので、恨んで、アベルを殺したという話だが、カインが悪に属していたと言うのはこの手紙の作者の解釈である。ここでは血の繋がらない共同体のメンバーだけではなく血のつながった兄弟の間でも対立があることを示している。

⁶⁴「正しい」は神に由来する。「悪」は悪魔に由来する。その対立からカインはアベルを殺したのである。

⁶⁵ここで問題になっているのは現在愛しているのか否かということで、改心をして、兄弟を将来愛するようになるということには述べられていない。終末が来ていると言う後の発言から、未来は問題にならない。

⁶⁶「移った」と「とどまった」が対比される。死と命の対比が天国と地獄の世界の暗示になる。死とは魂が地獄から抜け出させない、命とは魂が天国にいる状態のことで、肉体の命ではない。

⁶⁷この兄弟が意味するのは、カインとアベルのような対立する兄弟まで含む広い意味ではなく、アベルのような正しい仲間や肉親のことに限定されていると思われる。キリストは「世」のために命を捨てたからである。

⁶⁸兄弟のために命を捨てるのは、生きるための日常的必需品の供給まで含む現実なことであることを示している。同情はスブラグナの訳で、深い憐れみ、つまり命を捨てるほどではないが、愛の言い換えで、愛の言葉の繋がりの中にある。

⁶⁹「存じ」（現在形）でまえの3・19「知り」（未来形）と同じギノスコオだが、神と人間の知の違いを時制によって対比している。

⁷⁰前の節が「あらうとも」とあり「なければ」という肯定と否定の対を作ってあらゆる場合という意味を表現している。

⁷¹安心・ペイトには確信するという意味があり、確信パツレシアと対になっているが、パツレシアには大胆さとあり思いに揺るぎがないと言うことであらう。

⁷²霊の精神性の強調に対して、現実の肉の確認をしている。

⁷³「勝つ・ニカオ」に由来する言葉が6回も繰り返され、組織の内部で教義に関する争いなどがあつたことをうかがわせる。

⁷⁴真理と惑わし、これは前の神と世の対比と対応している。

⁷⁵原文は「神は愛です。なぜならば、」で4・16と対となっている。

⁷⁶「全うされるテレイオオ」という言葉が4・12、4・17、4・18と3回繰り返される。最後は否定形であるが、恐れが全うされないと現れる。逆に言えば、全うされるという恐れが無くなるわけ、これは人間側のことで、「神の」という言葉があつてもそれを受け止める人間側の信頼や確信を意味しているように思われる。

⁷⁷御自分の霊とは聖霊以外にはない。ここにも父と子と聖霊という三位一体の萌芽がある。三位一体論は共同体論にも関係する。

⁷⁸愛が完成すると恐れがなく、愛が完成しないと恐れがある。神の内とわたしたちの内が一体化している。

⁷⁹一章に2回出て、残りの九回はこの五章に出てくる。

⁸⁰これは後世の挿入ではあるのだが「天で証する者が三人いる。すなわち、父とことばと聖なる霊である。そしてこの三者は一致する。また、地上で証する者が三人いる。すなわち」5・8へと続く。（新約聖書Ⅲヨハネ文書 岩波書店）言葉が付け加えられていたが、三位一体論との関係の深いこと

るである。⁸¹死にいたる罪はイエス・キリストを神の子と認めないことである。死に至らない罪とはそれ以外の共同体に不和をもたらす違反行為と思われる。それは許され、再び兄弟(仲間)として受け入れられる。⁸²真実の神と御子イエス・キリストを反復し一つに重ね、それを最後に、偶像と対比している。『注解』や『略解』などでは偶像についての言葉は唐突に現れると書かれているが、フランシスコ会の注では意味の上から対比がなされていることを認めている。⁸³ビュラツンには避ける他に、注意、警戒する意味があり、神と神以外の区別を知って、注意して避けることと繋がるように思われる。

参考文献

- 新約聖書
 日本聖書協会 口語訳 1954年
 日本聖書協会 共同訳、1978年
 堀田雄康・全注 共同訳 1981年
 新共同訳、1987年
 日本聖書刊行会 新改訳 1988年
 フェデリコ・バルパロ訳、講談社2000年
 フロンシスコ会訳、中央出版社 1985年
 大貫隆訳『ヨハネ文書』岩波書店 1995年、
 田川建三訳『パウロの書簡』2007年
 高橋監修 川島他編 新約聖書注解・新共同訳(2) 1991年
 山内真監修 新共同訳新約聖書略解2000年日本基督教団出版局
 津村春英『ヨハネの手紙1』の研究』聖学院大学出版会2006年
 バークレー『ヨハネ・ユダの手紙』柳生望訳ヨルダン社1971年
 R・ブルトマン『ヨハネの手紙』川端純四郎訳、1987年
 リュウ『ヨハネ書簡の神学』山岡健訳 新教出版社、1999年
 伊吹雄『パウロによる愛の讃歌』知泉社 2010年
 z・イェール『聖書思想辞典』三省堂1973年
 拙論『ヨハネの手紙1』をどのように読むか』上智人間学紀要42
 2012年
 その他、THE RSV INTERLINEAR GREEK-ENGLISH NEW TESTAMENT
 と日本語のインターリニア(ポーロス会)と岩隅直の希和对訳脚注
 付き新約聖書(山本書店)なども参考にした。